

彦根市松原内湖遺跡発掘調査現地見学会資料

開催日 平成20年(2008年)11月24日(月)

調査主体 滋賀県教育委員会文化財保護課

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

1. はじめに

松原内湖遺跡は、琵琶湖東岸に位置する旧松原内湖の湖岸に立地します(図1)。滋賀県教育委員会と財団法人滋賀県文化財保護協会では、琵琶湖流域下水道東北部浄化センターの建設・増設工事に伴い、滋賀県東北部流域下水道事務所の依頼により、昭和59年から発掘調査を進めてきました。今回の発掘調査は平成18年7月から3ヶ年計画で北側地区において実施してきました。対象地域は旧松原内湖に隣接する丘陵の谷部2箇所(第2調査区・第4調査区)で(図2)、調査の結果、奈良時代の集落跡や中世の屋敷地跡などが良好な状態で見つかりました。

調査にあたっては、彦根市民の方々や事業関係者のご理解とご協力をいただき、円滑に作業を進めさせていただいております。ここで改めてお礼申し上げます。



図1 調査地位置図 (S=1/25,000)

2. 松原内湖遺跡の歴史的環境

これまで行われた松原内湖遺跡での発掘調査により、旧松原内湖岸では縄文時代から江戸時代にかけて、連綿と人々の営みが行われていたことがわかってきました。今年度の主な調査成果では、奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物などが検出されています。同時代の遺構は、内湖に堆積した土砂などからも、土器や皇朝十二銭などが多数出土しています。

この場所は犬上郡の北端部にあたり、坂田郡に隣接します。当時は青柳郷の一部であったとする説もあります。また、調査地から佐和山丘陵を挟んだ東方約 1.6km には、古代の主要幹線道路である東山道が通っていました。なお、松原内湖は、戦時中からの干拓により現在は耕地化され、近年は宅地化も進んでいます。

3. 発掘調査の成果

(1) 第2調査区

南向きの谷間の緩斜面地に位置する調査区です。平成18年度からの発掘調査において、奈良時代の集落跡が良好な状態で見つかっています。今年度は最も標高が低い内湖に近い地点を調査したところ、縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が見つかりましたが、谷の上部ほど遺構の数は多くはなく、この場所が利用される頻度はそれほど高くなかったと考えられます。この中で注目されるのは、古墳時代と奈良時代の遺構です。

古墳時代では古墳の「主体部」と呼ばれる墓穴が見つかりました。墳丘や周溝などは後世に削られて残っていませんでした。長さ約2.0m、幅約0.8mの規模で、深さ約0.2m分が残っていました。埋まった土の観察から、木製の棺を埋めたことがわかりました。主体部からは、枕に使われたと考えられる須恵器の坏(つき)蓋や、耳に装着していたと思われる金環などが見つかりました。須恵器の特徴から、6世紀に作られた古墳であることがわかりました。

奈良時代では、掘立柱建物の柱穴が多数見つかっています。中には、直径0.8m前後の柱穴9基で構成される2間×2間の掘立柱建物1棟があります。重いものを入れても大丈夫な建物で、倉庫になる可能性があり、船で運ぶ荷物を保管していたのではないかと考えられます。

(2) 第4調査区

第2調査区から尾根を隔てて南東約700mにある調査区です。西向きの谷間の緩斜面地に位置します。丘陵が崩落して厚く堆積した土砂の下から、縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が見つかりました。ここでも奈良時代と中世の建物跡や土器類が多く見付き、この時期に集落が営まれていたことを物語っています。今後谷の全域を調査すれば、この集落がさらに広がる可能性もあります。

奈良時代では、第2調査区と同様に、竪穴住居1棟や掘立柱建物の柱穴が、緩斜面地の上半部を中心に多数見つかっています。柱穴は、建物の配列などやその数から、複数棟の建物が何度か建て替えられたことも考えられます。出土遺物には須恵器・土師器といった土器類や漁網錘に使う土錘などがあり、ここにも普通の集落が営まれていたと考えられます。また、谷底を流れた川の跡から、奈良時代の須恵器の坏や壺・甕などがたくさん出土しています。上流から流されてきたと考えられることから、奈良時代の集落の中心は、今年度の調査地よりも谷の上部にあったといえます。

中世では、掘立柱建物の柱穴が多数見つかったほか、建物の軒下に掘られた雨落ち溝や、不定形の土坑(どこう、大型土坑)・墓などが、調査地のほぼ全域から見つかっています。これらの遺構からは、信楽焼のすり鉢や常滑焼の大甕などのほか、古瀬戸の小皿や中国産の青磁の碗、土師質の皿や焙烙(ほうらく:平たい土鍋)なども出土しています。これらは、その特徴から14・15世紀に作られたものであることから、この場所で屋敷地が営まれていたのは室町時代頃と考えられます。出土遺物では、そのほかに鎌などの鉄製品の刃を研ぐための砥石も多数見つかっています。

4.まとめ

今年度の松原内湖遺跡の発掘調査では、主に3つの時代の遺構・遺物が検出されました。

古墳時代では、第2調査区で見つかった古墳は、松原内湖遺跡では初めての発見です。この時期の古墳は単独で作られることは少なく、「群集墳」と呼ばれる小規模な古墳を多数作ります。したがって、ほかにも小規模な古墳を近くに築造した可能性は高いのですが、見つかっていません。後世の地形の改変の影響があるのでしょうか。

次に奈良時代になりますと、第2調査区・第4調査区の両谷間に集落が作られます。滋賀県内では、このように谷間の緩斜面に立地する集落はこの松原内湖遺跡以外には見つかっていません。東山道などの主要幹線道路から丘陵を挟んで離れて、一見不便な場所に思われます。しかし、三方を山に囲まれ、南側に内湖をのぞむこれらの谷は、日当たりがよく琵琶湖を渡る風をさけることができ、住環境には適していたといえます。また、陸路では行き来しにくい場所ですが、舟などを使った水上交通が当時は盛んであり、決して隔離された場所ではなかったと思われます。特に内湖は、水運によく使われていたようですから、ここに住んでいた人々はそういった水運を担っていたのかもしれない。また、土錘が多く見つかることから、漁業もこの集落の生業の一つとして考えられます。

中世については、第4調査区で室町時代の屋敷地が見つかっています。室町時代は、武士社会と個人志向の多様化に相まって、農業生産の高揚が農業経営を自立化させて耕地は拡大していきます。そのような背景のもと、緩斜面地でも開墾がなされ、集落と畑が形成されたのではないかと考えられます。発掘調査に着手する前は、この谷には雛壇状の畑がありましたので、中世から耕作地として引き継がれた可能性もあります。

明治期初期に描かれた古地図などには、彦根側から松原内湖に沿って、さらに今年度の発掘調査地のある丘陵辺りを通って米原市側に抜ける道が書き込まれています(図3)。昭和63年度の発掘調査では、内湖の南側で江戸時代前後の遺構が見つかっています。今年度の調査では道の遺構は見つかっていませんが、この道が中世や古代にまでさかのぼると考えますと、第4調査区が位置するあたりになりますので、道沿いの往来のしやすい場所だったと思われ、水運の交通が可能であったことがうかがわれます。

今年度を持って松原内湖遺跡北部地区の発掘調査は終了となります。3年にわたる調査により、縄文時代から近世にかけての様々な遺構・遺物が多数見つかりました。これらは、この場所に刻まれた人々の営みの痕跡であり、たくさんの人々が長い時代にわたって内湖と丘陵が接するこの地で活動していたことの証拠です。来年度以降も国道8号線バイパスに伴う発掘調査が予定されていますので、さらに多くの成果があがることが期待されます。

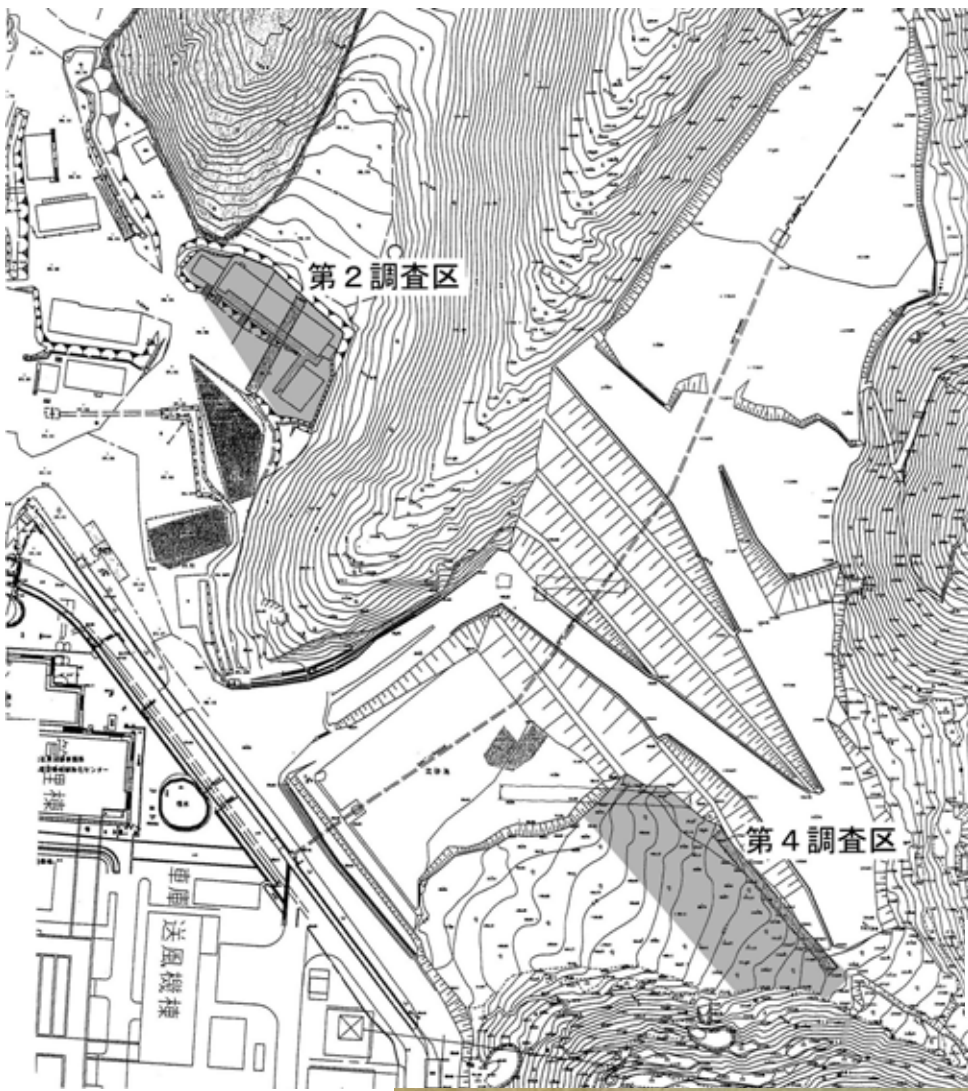


図2 調査区位置図
(S=1/1,000)

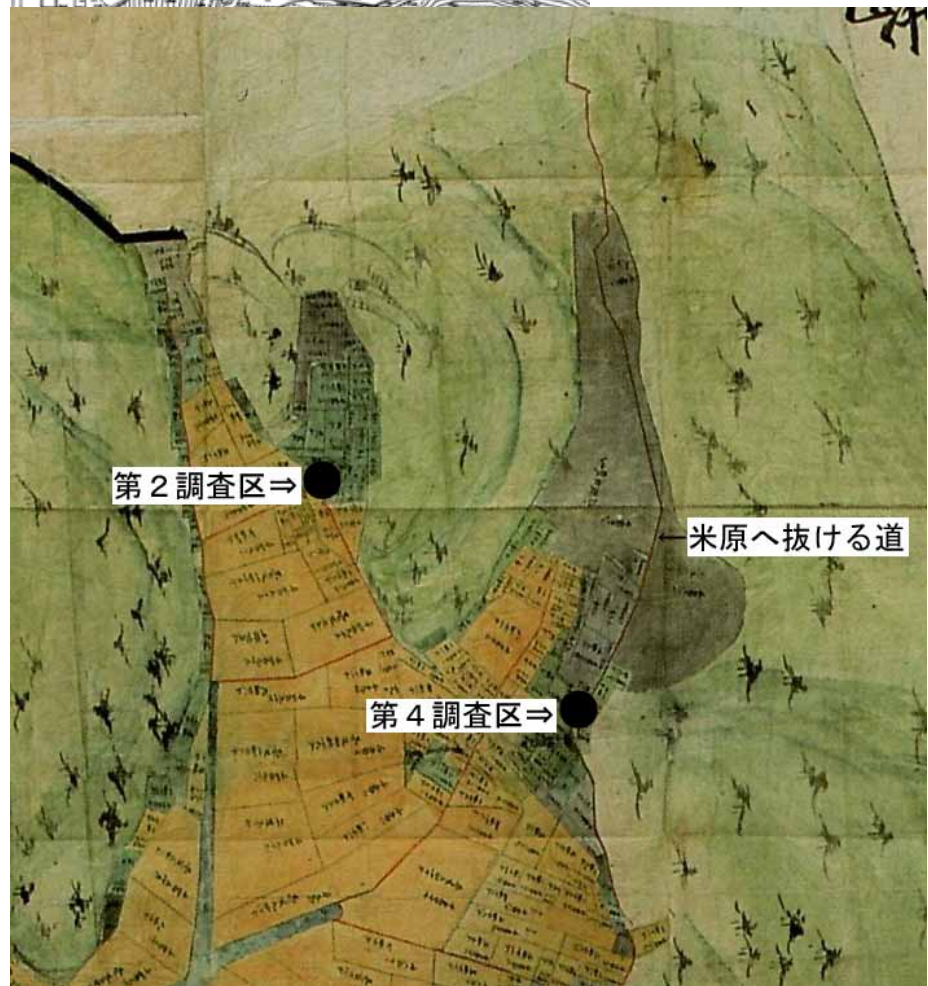


図3 明治期初期の絵図



第2調査区

古墳主体部（須恵器の坏蓋を枕にしています）



第2調査区

奈良時代の掘立柱建物（2間×2間の建物です）



第4調査区

奈良時代の竪穴住居（残りはあまりよくありません）



第4調査区

中世の屋敷地跡と自然流路（掘立柱建物の柱穴や雨落溝・不定形土坑などがあります）



第4調査区

自然流路の奈良時代の須恵器の出土状況（坏や壺・甕などがあります）



第4調査区

中世の柱穴（中から焙烙(ほうらく)が見つかりました）